

2016 年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B3H006

氏名： 掘越 紀香

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目： 幼児における「ふざけ行動」の意義

論文審査委員： （主査） 佐久間 路子
無藤 隆
廣澤 満之
藤崎 眞知代（明治学院大学）

1. 論文内容の要旨

第1章では、ふざけ行動に関連する研究を取り上げて概観し、第2章以降（研究1～5）では、ふざけ行動の遊戯性と二面性・両極性を念頭に置きつつ、保育場面で観察される幼児のふざけ行動を「ふざけの発達的变化」、「個人と仲間集団でのふざけ」、「ふざけと遊びとの関連」の視点から検討した。第7章では、幼児期のふざけ行動の意義として、円滑なコミュニケーションを促す役割、困りや葛藤・揺れへ対処する役割、ふざけと相対する集中・没頭での学びを支える役割について取り上げ、ふざけ行動の二面性・両極性に伴う曖昧性と支援性について考察し、幼児教育におけるふざけ行動への積極的位置付けを試みた。

方法としては、2つの幼稚園において、自由遊び時間にビデオカメラを用いて長期的な自然観察を実施した。研究1、研究2、研究3は、私立A幼稚園のコホート1について3年間（3歳児10月～5歳児2月）、研究4は同じく私立A幼稚園のコホート2について2年間（4歳児10月～5歳児3月）の自然観察を行い、分析した。研究5は、国公立B幼稚園のコホート3について1年間の自然観察を実施した。分析は、量的方法、質的方法を組合せて行った。また保育者へのインタビューを行ったほか、ふざけ行動の流れを数値化し統計的に分析しつつ、その裏付けとなる事例と往還して確認した。

研究1では、ふざけ行動が仲間関係の中でどのような役割を果たしているのか、ふざけの種類やふざけの流れとの関係とその機能および年齢差と性差を検討した。その結果、大げさ、真似、からかい、言葉遊び、タブーの5種類と、関係強化 pos.、関係強化 neg.、緊張緩和、仲間入り、自己主張の5機能が見出された。発達差として、3歳児では大げさや真似が多く、からかいや言葉遊びは少なかった。また関係強化 pos.のような相手に受容されやすいふざけが多く、関係強化 neg.や緊張緩和のふざけは少なかった。5歳児では、からかいのような関係強化 neg.のふざけが多く、関係強化 pos.は少なかった。性差も見られ、男児はからかいやタブー、緊張緩和や自己主張のふざけが多く見られたが、女児は大げさや真似といった相手に受け入れられやすい関係強化 pos.のふざけが多かった。

研究2では、大人が望ましくないとするタブーのふざけが子どもにとってどんな意味が

あるのかを、3年間の縦断観察をもとに検討した。3歳児2月にタブーは多く観察され、5歳児には減少した。また、タブーはどの年齢でも女児より男児に多く見られた。事例では、仲間との不安定な状態を調整する機能があること、タブーを使って仲間関係を調整するスキルが3歳児より4歳児以降で巧妙化することなどが示唆された。

研究3では、ふざけが多く観察されたタクに注目して、幼児の仲間関係の変容とふざけ行動との関連について検討した。ソシオグラムの結果やふざけの事例から、5歳児になると、「からかい」のふざけの多いタクは、共に楽しめるサトたちのいる集団に居場所を見つけ、ふざけのやりとりが多く見られるようになった。ふざけの生起が仲間関係の変容と連動していることが考察された。

研究4では、難しいことや新奇の場面などに抵抗を示すようになった「ちょっと気になる」リュウに注目し、リュウのふざけ事例（4歳児～5歳児）を検討した。リュウにとっては、ふざけのやりとりが特定の仲間とのコミュニケーション手段として重要であり、関係構築や関係確認、関係強化の機能を持っていた。また、新奇の場面で生じた不安や緊張に対して緊張緩和するなど、困難に対処する機能も持っており、リュウにとっては、抵抗を感じる場面で、自らのふざけを通して緊張緩和し切り抜けた経験に重要な意味があったことを指摘した。

研究5では、ふざけ行動を、遊びとの関連から捉えるため、幼小接続期にあたる5歳児後半に観察された、集中・没頭して取組んで継続した遊び（段ボールのお家づくり）の事例について検討した。継続した遊びが展開する中で示された仲間との関係性の変容と集中・没頭との関連、さらに葛藤・揺れ、ふざけを捉えて質的に考察した。集中・没頭した要因、遊びが継続した要因として保育者の援助や環境構成が重要であったとともに、葛藤や揺れ、弛緩・発散するふざけ行動が、遊びへの集中・没頭と遊びの継続を支えていた点について考察した。

総括的討論では、第一にふざけの機能をコミュニケーションの円滑さと葛藤・困りへの対処という点から総合的に考察した。ふざけの「関係強化 pos.」の機能がコミュニケーションを円滑に進めるための役割を担っているのに対し、「緊張緩和」は葛藤・困りへの対処方略としての役割を果たしていた。本研究では、ふざけ行動の機能として「緊張緩和」に焦点化し、ふざけ行動の「遊戯性」だけでなく、「支援性」についても明示した点が重要である。また、機能ごとにふざけの流れの展開プロセスがある程度定まっていることが示され、ふざけをする行為者と相手の双方が仲間とともにその遊戯性を捉えながら、ふざけを楽しむことがしやすくなることが考察された。第二に、ふざけと遊びとの関係を二面性・両極性による曖昧性と支援性を備えた行動として考察し、（1）遊戯性を伴い、ポジティブなコミュニケーションを円滑に進めるためのものであること（遊戯性）、（2）いざこざなどのネガティブな状況に対応する対処方略となっていること（支援性）、（3）集中・没頭や、集中・没頭することで生じる学びの芽生えや社会情動的スキルの育成を、弛緩・発散の一表現として支えていること（支援性）、（4）二面性・両極性の特徴を持ち、状況に応じて変容する曖昧性の高い行動であり、状況や行動から意図を読み取って判断するため、幼児にとっても保育者にとってもスキルを高める機会となりうること（二面性・両極性、曖昧性）の4点をふざけ行動の意義と幼児教育での積極的な位置付けとした。

本研究の限界と今後の課題としては、女児のふざけ行動の役割についても捉えること、幼児のふざけ行動と子どもの認知的発達や社会情動的発達との関連を検討すること、幼小接

続期も含めた小学校以上のふざけ行動、ユーモア行動、攻撃行動とのつながりを捉えることの3点の必要性が挙げられた。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、幼児の互いのふざける行動を長期にわたる幼稚園での観察から取り出し、その発達的特徴を記述した上で、理論化したものである。幼児のふざけ行動はよく見られるものでありながら、自然場面でいつ起こるともしれないものであり、さらに文脈に依存して解釈されることが多いために観察による系統的な研究が行われてなかった。本研究は長期にわたる観察研究を通してふざけ行動を収集し、3歳から5歳の年齢的变化や、日頃の仲間関係との関係、また個別のふざけ行動が多い子どもにおける検討等を通して、ふざけ行動の生起の始まりから終わりの流れのパターンを見出し、それが年齢その他でどう変化するかを明らかにした。結論として、ふざけ行動は遊戯性と攻撃性という二面性・両極性を持ち、どちらの意味も含む曖昧性を特徴とし、それを緊張した状況を緩和する支援機能や、プレイサイン等を読み取る面白さや、曖昧さがあるからこそ、それが幼児同士の交渉に用いられるのだということを示した。

第一回目の審査会は、2016年11月11日18時半から開かれた。全体として、幼児のふざけ行動という、よく見られることでありながら、実証的な研究がないことに注目し、比較的に生起頻度が低い現象を長期にわたり観察を繰り返し、実証的な分析の上、理論的にまとめたことが評価された。その上で、理論的・分析的にいくつかの補足が求められた。6章と7章の位置付けが曖昧であり、論文全体の目的であるふざけ行動との関連がはっきりとしない。分析方法などが説明不足のところが多いという点を修正することが求められた。

第二回目の審査会は、2017年1月13日18時半から開かれた。求められた修正点についてよく直してあり、論文の問題点がほぼなくなった。特に、「ふざけ行動」といった比較的発起頻度が低く、その産出に注目すると、自然的な日常場面の長期的な観察が不可欠であり、それを丁寧に行っていることや、行動として多機能的であり、意味が文脈に依存し、本来的に曖昧さを含み込んだものであるところを、方法や理論枠組みをよく工夫して捉えていると高く評価された。いくつかの観察研究を行っているが、それらの間のつながりも分かりやすくなった。なお、第7章の結論において、例えば、「二面性」「両極性」といった概念や、その他の特徴が並列的に示されており、関連がはっきりとしていない。「弛緩と発散」や「集中と没頭」などの概念もどういう定義であり、どこまでの範囲を指すのか。遊びの定義とはどこが違うかなどを明確にする必要がある。上記のようなところをなお修正した上で、公開審査会に進むことが了承された。

第三回目の公開審査会は、2017年2月8日19時15分から開かれた。質疑の主なものは次の通りである。質疑では、ふざけ行動の定義と分類や発達的变化について、いくつか質問が出され、適切に回答された。審査委員から、膨大なデータをよく整理したこと、ふざけ行動の構造と機能を検討した点に意義があること、自然に起きた事象を丁寧に根気よく記録し、そこから文脈の中のダイナミズムを取り出すことに成功したこと、特に、曖昧性や二面性・両極性があるという理論化は遊びについてと同様だが、ふざけ行動では1つの行為に集約され表出されるという特徴があることを示したことなどが高く評価された。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされ、公開審査での質問に的確に答えたことが認められ、博士論文として合格と判定した。